世界の先史文化における縄文文化の特徴と価値

サイモン・ケイナー（英国イースト・アングリア大学日本学研究所所長）

日本列島における縄文時代の考古学は、世界の先史学にとって非常に重要です。しかし主に言葉の壁のため、世界的にはまだその本当の価値に相当する影響力を持っていません。その意味で、北海道南部と北東北地方のみごとな縄文遺跡群をユネスコの世界遺産に推薦することは、そうした現在の状況を是正するために役立つでしょう。

縄文遺跡の最初の報告は19世紀にまで遡り、それ以来、縄文時代の考古学は世界的に大きな関心を呼んできました。1877年にエドワード・シルベスター・モースが行った大森貝塚の調査は、日本の遺跡を扱ったものとしてははじめて、学際研究や対訳にも配慮した本格的な考古学調査報告を生み出したばかりでなく、“イラストレイテッド・ロンドン・ニュース”―それは19世紀のCNNともいうべきものですが―などを通じて広く報道されました。またニール・ゴードン・マンローが、1908年に日本の考古学に関する初めての記念碑的な概説書『先史時代の日本』を出版したときにも、縄文遺跡に大きな注意が払われました。

20世紀後半の考古学ブームは、疑いもなく、温帯における狩猟漁撈採集民の考古資料として世界で最も豊富な記録の成果です。それはいくつかの並外れた記録、つまり、集落、祭祀遺跡、墓地、驚くほど自然遺物が保存された湿地遺跡、洞窟や岩陰遺跡、原産地遺跡、加えてモースによる最初の報告のような数千の貝塚の完全な発掘調査です。

日本列島の縄文人の業績には計り知れない意義があります。例えば、農耕を選択する遙か以前、中近東やヨーロッパより数千年も早く、世界最古として知られる15,000年前の大平山元遺跡の土器です。また垣ノ島Ｂ遺跡で明らかになった約9,000年前の漆の利用は、西洋の考古学者が時折使う「アフォーダンス」という生態心理学の概念、つまり彼らと彼らが入手できる素材（環境）との詳細な関係性について証明しています。最も大規模な集落であり、1500年以上という同時代の世界のどんな都市よりも存続した三内丸山遺跡（青森市）を含め、彼らは桁違いに集落に長期間住んでいました。

縄文人は土器づくりにおいて特筆すべきデザインセンスを発揮しました。最も初期の土器でさえ、繊細な粘土紐の隆線紋様など、際だったデザインで装飾されています。2009年にロンドンの大英博物館で開催した縄文土偶の展覧会（The Power of DOGU）では、まるで現代の造形のように見える多くの土偶について、何千年も前に作られたものとは信じがたいと多くの来訪者が発言していました。この高度に発達したデザインセンスは、土器づくりの卓越した技術に支えられており、それは、著保内野遺跡（函館市）で地元の主婦が農作業中に偶然発見した“カックウちゃん”と呼ばれる中が空洞に作られた土偶（中空土偶）が明確に示しています。

縄文人は、この世の中における自分たちの位置、あるいは別の世とのつながりにおいても、とても素晴らしく発達した感覚を明確に持っていました。それを示す一例が、環状列石、配石遺構などの石造りの記念物です。ニール・G・マンローは、港町である北海道小樽市の郊外にある“忍路環状列石”に好奇心をかき立てられました。それ以来、日本の考古学者は素晴らしい秋田県の大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡、青森県の小牧野遺跡など石造りの記念物を幾百となく調査してきました。ただ典型的なストーン・サークルとして知られる英国のストーンヘンジのように、そうした記念物には、天体の運行との関連は何か、死や埋葬に関するものか、季節的な儀式あるいはその両方なのかなど、まだ多くの謎が残っています。これらの謎めいた遺跡は、考古学的調査を通じて視覚的なモニュメントとして慎重に復元されており、現代の人々がすぐに行ってみたくなります。一方、トンネル工法で保存した鷲ノ木遺跡（森町）が示すように、時には開発事業に直面し、考古学者は遺跡の保存を確保するために長い時間かけて努力することもあります。

これらの遺跡やモニュメントは、縄文集団が、知的にも現在の人間と全く同様であり、その独自の文化的な洗礼による表現の相違はあるものの、感情や能力においても私たちと同じだったことの確かな痕跡です。彼らがどのように話したか再現することはできませんが、彼らは間違いなく、彼らを取り巻く世界を表現するための多くの概念を創造し、豊かな言語を持っていたに違いありません。縄文考古学の研究は、同じ日本列島で現在の私たちと違った生活、別の暮らしを営むとしたらどんなものか、それを垣間見せてくれます。そして多分そのことが、縄文が現在も魅力を持っている理由の一つなのでしょう。

北海道南部と北東北地方に存在する一連の縄文遺跡群をユネスコの世界遺産として登録しようと目指すことは、世界の先史学や現代社会のために、縄文文化の意義を再検証する機会の到来です。遺跡を解説する新しい施設も多くできており、際だって優れたディスプレイ、そして日本語だけでなく英語による解説は、現代の来訪者にとって最高の案内となります。2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは、世界の目はかつてないほど日本に注がれます。これは、誰もが縄文時代の遺跡の優れた普遍的価値、そして人類の歴史における重要性について理解できる、新しい方法で縄文文化の素晴らしさを示す機会－世界の先史時代における縄文の意義を見直し、現代社会のなかで縄文の価値を見直す機会－の到来になります。

縄文遺跡群は、ヨーロッパのどの大聖堂とも対等の価値があり、フランスの後期旧石器時代の洞窟壁画にも匹敵する重要な価値を持つものなのです。